

スクーバダイビング中のパニックに関する研究  
古家 慎也 (生涯スポーツ学科 野外スポーツコース)  
指導教員 林 綾子

キーワード：スクーバダイビング，パニック，事故

## 1. 序論

現在，レジャーとして年間にダイビング活動しているダイバーは20万人から30万人と報告されている。(蓬郷・千足，2011)。その一方で，スクーバダイビングにおける事故もあとを絶たない現状である。そして事故の引き金としてパニックが多く挙げられている。そこで本研究では，①スクーバダイビングを行ったダイバーにパニックの発生について調査し，性格特性の1つである情緒不安定性との関連性を明らかにする，②パニックを体験したダイバーに，パニックの調査を行い，その内容・種類・程度・対応・原因を明らかにする，③インストラクターへのインタビューをもとに，パニック発生に対するインストラクターの認識や対処方法を明らかにすることを目的に調査を行った。

## 2. 研究方法

### 【対象・時期】

2016年8月10日～8月28日中17日間に，①沖縄ダイビングショップのダイビングツアー・ライセンス講習に参加したファンダイバー，体験ダイバー84人，②その中でパニックを起こしたダイバー32人，③インストラクター4人を対象とした。

### 【調査内容】

①ダイビング前に情緒不安定性(戸塚・上北・狩野，2011)を調査(事前記述アンケート)，②ダイビング後にパニックの状況，程度を調査，③インストラクターにパニック対応方法を半構造化インタビューで行った。今回調査した情緒不安定性とはBig five尺度が仮定する性格の一側面で，不安感を感じやすく動揺しやすい側面のことである。

## 3. 結果と考察

①スクーバダイビング中にパニックを体験したダイバーは，84名中の32名(38%)で，パニック群と非パニック群において情緒不安定性を比較した結果，パニック群が有意に高かった( $t(84)=2.64, p<0.05$ )。先行研究でも特性不安との関連が示唆されていたが，本研究では特性不安の情緒不安定性がダイバーのパニック発生と関係があることが明らかになった。

パニック群と非パニック群においてダイビング経験本数を比較したところ，有意な傾向が見られ

た( $t(84)=-1.92, \not<.10$ )。経験が少ないダイバーは問題が発生しても解決策を知らない，手順通りに行うことができないことでパニックが発生していると考えられる。

②ダイバーに調査したパニック事例を分類すると，「スキル不足」，「呼吸」，「身体的痛み」，「マスク浸水」，「海水誤飲」，「器材トラブル」，「その他」の7つに分けられた。「スキル不足」には，自分ができることで1人遅れる，グループに迷惑をかけているなどの焦りが発生しており，多くのダイビングがグループで行われ，仲間との関係からもパニックが発生していると考えられる。「その他」中の「恐怖心」ではインストラクターへの恐怖心からパニックが発生している事例も見られた。

③インストラクターへの調査からは大きく3つの認識が分かった。1. 初めてスクーバを啜って水中に入ると，大小関わらず必ずパニックが起きているという認識。2. パニックを体験しているダイバーに多い事例は呼吸・耳抜き・マスク浸水の3つであるという認識。3. パニック発生に対するインストラクターの責任という認識。インストラクターはマニュアル化された講習内容を指導することも重要だが，ダイバーの性格や自分自身の影響を配慮し，ダイバーとの関係構築への努力が重要であると考えられる。

## 4. まとめ

本研究から，ダイビング中のパニック発生はダイバーの性格や経験，スキル不足が大きく関係していることが示唆された。今後は，パニックと実際に起きた事故との関連性を調査していく必要がある。そして，現在スクーバダイビング特有の状況を考慮した尺度は見られないことから，これを作成し，調査していく必要がある。パニック発生への理解を深め，パニックの起きる頻度を減らすことができれば事故も減少すると考えられる。

### 引用文献

1. 戸塚唯氏・上北彰・狩野勉(2011)情緒不安定性の類似が対人魅力に及ぼす効果. 千葉科学大学紀要, 4: 45-53.
2. 蓬郷尚代・千足耕一(2011)レジャー・スクーバダイビングにおける事故の傾向に関する分析. 上智大学体育紀要, 44: 1-9.